

皇太子殿下・同妃両殿下御参拝



毎月十五日発行 発行所 社会 宗像大社 福岡県宗像郡玄海町 電話 09406 1311 代 定価 一年送料共 1000円

神具、装束 結婚式場用品 九州店 福岡市博多区東公園一三二(〒八三〇) 電話福岡(092)六五二九四五六番 本社 宗像郡玄海町八六八条北入(〒八三〇) 電話宗像(094)三三三三三三番 電話京都(075)三三三三三三番 株式会社 井筒



皇太子・妃両殿下を神門前にて、お出迎えされる葦津宮司

皇太子殿下・同妃両殿下御揃いの行啓を仰ぎ奉るの、当大社の歴史上初めてのことであります。昭和五十八年五月十五日は、当大社の歴史に永久に銘記すべき日であり、絶好の五月晴れ、境内一杯に桶の若葉薫り、まさに行啓日和でありました。当日、午前七時三十分、本殿に於いて、宮司以下関係神職が一幣額料御下賜並行啓奉告祭一を奉仕した。当大社責任役員・特別奉迎者・職員等が整列御奉迎申し上げる中、定刻の午前十時二十九分、両殿下のお召車が御到着。お車から降りられた両殿下には、奉迎者の日の丸の小旗が打ち振られ、万歳の歓呼の声と拍手で渦巻く。両殿下には、つくりはほは笑まれ、右手をおあげになり、約千五百人の奉迎者にお応えになられた。両殿下には、衣冠束帯の葦津宮司の御先導により、御垣内に御参入せられ、御拝座に御揃いで御立ちになり、恭しく御神前に向い御拝礼遊ばされた。引続き、庭土を静かに玉歩を運ばせられ、神宝館に進まれた。沖ノ島の古代祭祀場から出土した遺品の国宝や重要文化財を御熱心に御覧遊ばされた。神宝館を御覧の後、御儀式殿の御休所にて、しばらく御休憩遊ばされ、定刻午前十一時四十五分、両殿下には御機嫌麗しく当大社を御出発になられた。

特別奉迎者にお手を上げて お応えになられる妃殿下

お出迎えに参進する 葦津宮司以下神職



沖津宮現地大祭斎行さる

——日本海海戦(明治三十八年)をトして厳肅に斎行——

玄界灘に浮かぶ絶海の孤島、筑前沖ノ島にて、去る五月二十七日、恒例の宗像大社沖津宮現地大祭が厳肅に斎行された。この大祭は、今から七十八年前の明治三十八年五月二十七日、沖ノ島沖で、ロシアのバルチック艦隊を、我が連合艦隊が撃破し、日露戦役で決定的勝利をもたらした日本海大海戦を記念して斎行し、併せて一般の篤信者の方々が、年に一度沖ノ島にお参りして戴ける機会である。本年は、百名程の参加者を数え、県教育長及野降氏を初め、全国各地より篤信者や学者が参加された。大祭前日の二十六日、午後六時より、筑前大島に鎮座する宗像大社中津宮に於て、宵宮祭が斎行され、参加者全員、お祭に参列、明日の大祭の無事を祈念した。明けて、二十七日、午前六時、五月晴れ、参加者は大島港に集合、担当神職の指示にしたがって、第七管区海上保安庁の灯台見回り船「げんらん」、大島漁船の海久丸・協栄丸・福吉丸の各船に分乗し、海上五十軒に浮ぶ沖ノ島に向け出航、いつもは荒れる玄界灘も、この日はやさしく我々一行を迎えてくれた。約二時間程で沖ノ島に到着、古例により、全員直に「海水鏡」を行い、同島中腹に鎮座する宗像大社沖津宮へ、千古斧鉞を入れない原生林におおわれた参道の約四百段の石段を息をはずませ登り終えると、五月とはいえ真夏を思わせる天候に、誰れの顔にも爽やかな汗が光っていた。神前には、横山の如く新鮮な海の幸・山の幸がお供えされて、午前十時、現地





宗像大社歌会 俳句作品集(四)

久留米市 入江 柳江 待ちわびし老の喜び水温む

福岡 廣渡一寿軒 鯉のほり下にお福渡(むつ)の暁月晴

水巻 新田 香織 花時計前て夫待つ春の午後

鐘崎 岩瀬 辰夫 誰が為の川の放流や夏近し

福岡 二宮 末子 補助車つけて自転車の子が走る

津屋崎 井浦 良介 黄砂降る満ち潮に聞く座ぶ声

東京 白木 静江 老を鳴く鶯根山霧らひ

田熊 力丸 一郎 夏の日の忍の影に亡父(ちち)の顔つ

藤沢 井上 玄洋 狛犬や萬緑の眼に神守る

名古屋 野崎 傳三 塵塚を気まままにめぐる靈魂

宗像郡考古学散歩

一寸休憩—対馬へ

いしいただし (2)



元冠の小茂田浜

志岐郷ノ浦には、二時 千許りの家あり、差(や)や三〇分に着きました。志岐(田)地有り、田を耕すもな

船が出ます。郷ノ浦から木上の方を見ましたら、やや春がすみかたれたので、

御蔵番日記

短夜(15)

六月二日 雨 六月二日 雨 先頃までは夏の秋なりし

人の下文(くだしぶみ)あ の預所僧の下文ありて、伊

吉留 高山 信子 人の踏む道を残して雑草の

武丸 立石るせ乃 柿の根元にひっそりと咲く

(31)

第二三回 宗像大社歌会詠草

毎月一日切詠草到着順

原町 八波 五月 枯木の木の根の雪が解け初

大島 豊福 猪走 新装の無線局舎の初出勤と

大島 目原 節子 石段にうつる花影淡々と続

大島 木田よしえ 雑木々からみる揺る藤

大島 目原たか子 華やきし桜の花も束の間

大島 屋形とみえ お母さんと弾みし声で呼び

大島 勝代 静寂を破りて小鳥群れて鳴

大島 中村さつき 山頂の城跡訪へば鐘の声類

大島 藤田よし子 菜畑も蓮華も今盛りなる

大島 藤田よし子 夕べ野の道花明りして

四角 二宮 末子 かのたむきし我身の哀しみ秘

吉留 白木うめ 野良猫の親子が居て眺る

吉留 白木うめ 注連飾りの鶴ほくしつ燃

香椎 板井 ツ子 朱の鳥居ぐるぐる日本の庭園

戸畑 日本ハツセ 水溢らせてやる

田久 立花 勇雄 病む部屋に妻が蒸しめるほ

津丸 松尾 豊 老いどちの寄りて語るはも

津丸 松尾 豊 さらさら死の恐怖より終

津丸 松尾 豊 さらさら死の恐怖より終

津丸 松尾 豊 さらさら死の恐怖より終